

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K21482

研究課題名(和文)戦後フランスにおける知識人の変容に関するメディア史的研究

研究課題名(英文)Intellectuals and the Media in Post-War France

研究代表者

中村 督 (NAKAMURA, Tadashi)

南山大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：50644316

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、(1)戦後フランスにおける知識人の変容、(2)メディア史の変容、(3)知識人とメディアの関係の変容、というテーマに関して、一次資料の分析を通じて、とくに社会史的な観点から成果を挙げることができた。とくに、アルジェリア戦争、68年5月、1970年代の社会運動など戦後フランスで重要とされる出来事に対して知識人が、どのようにメディアとの関係を築き、政治的・社会的役割を果たしていったのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、戦後のフランスにおいて「知」がどのようにメディアと結びつき、また、どのように社会のなかで役割を果たしてきたのかを歴史研究の見地から考察したことである。他方、社会的意義に関していうと、日本をはじめとする各国との比較研究の基盤を提供しうることである。他国の歴史的展開を通じて、メディアの発達や多様化によって「知」のあり方がどのように変化しつつあるのかを考えることができるように思われる。

研究成果の概要(英文)： This study approached the following themes from the point of view of social history : (1) the transformation of intellectuals in postwar France; (2) the transformation of media history; and (3) the transformation of the relationship between intellectuals and the media. In particular, it revealed how intellectuals were committed to important events such as the Algerian War, May 1968, and the social movements of the 1970s.

研究分野：フランス現代史

キーワード：フランス史 戦後フランス 知識人 メディア史 68年5月 フランス現代史 ジャーナリズム ジャーナリズム史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

フランスでは19世紀のヴィクトル・ユゴーやエミール・ゾラ以降、知識人が特権的な役割を果たしてきた。本研究が対象とした第二次世界大戦後の時期に限っても、植民地戦争、「68年5月」、1970年代の社会運動、大統領選等、至るところで「知識人」の政治参加を確認することができる。それゆえ、知識人の政治参加については、社会学や政治学といった領域で絶えず分析されてきた。事実、この領域自体の先行研究は多くの蓄積がある。

しかしながら、従来の研究では主に二つの問題点が残されている。一つは、知識人の言説を流通させるメディア側の研究である。つまり、本研究ではメディア史およびジャーナリズム史の展開のなかで知識人の変容を位置づける作業が必要であった。とくにフランスのメディア史およびジャーナリズム史は未着手の領域も多くあり、ある意味では今後、研究基盤の構築が期待されている分野でもある。もう一つは、方法に関することで、いわば知識人とメディアを対象にした歴史研究が手薄であることに関係している。文学や思想史においては知識人(作家や哲学者など)の発表した作品を対象として豊富な研究成果が残されており、社会学や政治学では理論に基づいた興味深い分析が行われてきた。しかし、とくに「戦後」にかぎれば、一次資料を利用した歴史的観点からの成果は少なく、この点も本研究の背景を成すものだった。

2. 研究の目的

以上を踏まえれば、自ずと本研究の目的は、戦後フランスにおける知識人の変容をメディア史観点から再検討することに定められる。すなわち、フランスでは19世紀末以降、知識人が様々な政治的・社会的局面において特権的な役割を果たしてきたが、それが戦後から今日に至るまで、いかなる変化を遂げてきたのかを歴史的連続性のなかに位置づける試みである。そのために一次資料に立脚して、新聞・雑誌やテレビといったメディアの変容が知識人やその社会参加に与えた影響を明らかにする。そのうえで、フランスにおける知識人の特質を浮き彫りにし、現代社会にあって「知」の様態がいかなるかたちで現出しているのかを提示する。

3. 研究の方法

本研究は、知識人の変容を一次資料の分析を通じて再検討することが主眼である。そのために以下の3点を方法として分析を行った。

(1) 知識人の変容の再検討：戦後フランスにおける知識人の変容を断絶性ではなく歴史的連続性のなかで考察する。この作業には作家、学者、政治家の言説の精査が求められる。とくに国立図書館、国立文書館、現代出版資料研究所等にはサルトルやアロン等主要な知識人のほとんどの文書が所蔵されているので、それら機関を訪問し、網羅的に資料収集・分析を行った。

(2) メディア史的側面からの検討：(1)で整理した知識人の変容をメディア史的側面から問い直した。主要な言論紙(誌)とテレビ番組をとりあげ、その相互的かつ重層的な関係を考察した。本研究の趣意に沿う資料を収集するために、主にパリ政治学院附属現代史史料センターにて作業を行った。

(3) 知識人の変容に関するメディア史的分析：上記の成果を踏まえたうえで、知識人の変容をメディア史的文脈のうちに位置づけた。とくに知識人がメディアといかなる関係性を築き、彼らの言説がいかにして有効性を獲得し、その結果、いかなる問題が生じたのかを分析した。他方、メディアの変容が知識人のあり方をどのように規定してきたかの分析も行った。

4. 研究成果

本研究では上述の方法で研究を進めた結果、以下の達成があった。

(1) 事例研究の深化

「68年5月」や1970年代の社会運動などに関して知識人とジャーナリズムがどのように関与を深めていったのかをメディア史的な観点から明らかにした。とくに「68年5月」については、言論紙(誌)(『ル・モンド』や『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』など)も特権的な位置をとることができず、組織内部において独自の展開をみせたことを明らかにした。また、「68年5月」の余波を受けて1970年代にメディアが変容していく過程についても考察を深めた。

(2) 記憶の問題系へのアプローチ

上記の事例研究を通じて、新しい論点の検証が必要となった。それは、知識人やジャーナリストらが、アルジェリア戦争や68年5月などの出来事に当事者として積極的に参加し、その後、いわば成功体験として語られ直す経緯であり、いわば「記憶と歴史」の問いに属する問題系である。本研究が扱った各事例はそれ自体で今後も歴史研究の見地から新しい成果がうまれると思われるが、その一方で、それらの記憶が現代社会で果たす意味も重要であることがわかった。

(3) メディア史およびジャーナリズム史の問題

上述のように、本研究はメディア史およびジャーナリズム史の理解を深めることも目指していたが、この点で大きな成果があった。第一は、戦後、ジャーナリズムが制度的または社会的に

どのように構築されていったのかという新たな問いを見出したことである。また、この問いに答えるためには、戦前、とくに両大戦間期に時期を広げて、知識人と言論界の関係を分析する必要がある。第二は、地方のジャーナリズムに関する重要性の認識である。本研究が対象とした広く知識人とメディアの問題は、全般的にいつてもパリを地理的な舞台の前提として議論が進められてきた。しかし、地方とパリのジャーナリズム界はそれほど容易に分けられるものではなく、両方を分析していくことが望ましいように思われる。第三は、1980年代以降におけるメディアの変容に関する理解の深化である。本研究は、1980年代前半までを対象としたが、この時代以降にメディアは大きな変化を経験した。新聞・雑誌の売却・買収が続き、それに応じて知識人のあり方も変化した。本研究の成果を基盤として、この問題に取り組むことも可能であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中村督	4. 巻 5月号
2. 論文標題 68年5月 - ミシェル・ロカールと社会民主主義の発見	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 167-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村督	4. 巻 792
2. 論文標題 ジャーナリズムに対する曖昧な信頼－政治のなかの感情とコミュニケーション	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『新聞研究』	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村督	4. 巻 40
2. 論文標題 フランスのメディア史研究に向けて	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『メディア史研究』	6. 最初と最後の頁 141-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村督
2. 発表標題 1980年代フランスにおけるメディア企業の変容 ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール社の危機に着目して
3. 学会等名 経営史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村督
2. 発表標題 68年5月を考える
3. 学会等名 南山大学地域研究センター共同研究（「1968年」の意義に関する総合的研究 - 「時代の転換期」の解剖）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村督
2. 発表標題 キリスト教民主主義とジャーナリズム 『ウエスト・フランス』の組織化に着目して
3. 学会等名 南山大学地域研究センター共同研究第5回研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中村督
2. 発表標題 戦後フランスにおける情報秩序の再構築－「カイエ・ブルー」とジャーナリズム
3. 学会等名 日仏政治学会
4. 発表年 2015年～2017年

1. 発表者名 中村督
2. 発表標題 文明的粛清の可能性－『ウエスト・エクレール』裁判を中心に（1944-1946年）
3. 学会等名 南山大学地域研究センター共同研究（近代のヨーロッパとアジアの「文明化」の作用）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村督
2. 発表標題 68年5月の歴史・記憶・政治文化
3. 学会等名 フランス政治思想研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKAMURA Tadashi
2. 発表標題 Glocalisation de la presse étrangère ou création d'une nouvelle forme de lecture : le cas de ELLE Japon et de VOGUE Japan
3. 学会等名 Workshop Labex ICCA
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 行路社	5. 総ページ数 327
3. 書名 藤本博編 『「1968年」再訪 - 「時代の転換期」の解剖』	

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 行路社	5. 総ページ数 287 (109-132)
3. 書名 丸岡高弘・奥山倫明編 『宗教と政治のインターフェイス - 現代政教関係の諸相』	

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2015年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 450
3. 書名 西田慎・梅崎透編『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」』	

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 260
3. 書名 渡邊啓貴・上原良子編『フランスと世界』	

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 362
3. 書名 平野千果子編『新しく学ぶフランス史』	

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 行路社	5. 総ページ数 196
3. 書名 大澤広晃・高岡祐介編『近現代世界における文明化の作用－「広域」の視座から考える』	

1. 著者名 中村督（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 346
3. 書名 上垣豊編 『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----